

災害報告

多くの人々に支えられ皆で乗り越えた震災

尾蔵亜矢子

介護老人保健施設 和光苑

【要旨】

新しい年の幕開けに我が施設も地震により大規模な損壊を受けた。入所者、職員共に被災し「当たり前の日常」を送ることができなくなった。ライフラインの復旧もままならない中、寒さなど劣悪な環境に置かれている入所者に1日でも早く「当たり前の日常」を取り戻すべく職員が一丸となり、「止めない介護」を行うことができた。しかし、それは職員の努力だけではなく、関連施設、行政、医療関係者など県内外問わず応援の方々の多くの温かい支援を受けることができたおかげで震災を乗り越えられたものであると考える。初めて「大規模な震災」を経験し、私たちがこれからどのようなことに「備え」ていかななくてはならないのか、そして今回の経験を踏まえ「もしもの時に」どの様にして対応していくべきか考えさせられたことを伝えたい。

Key Words : 止めない介護, 備え, 支え合い

【はじめに】

令和 6 年能登半島地震で介護老人保健施設和光苑も断水、暖房の故障、液状化現象、通路の一部が損壊と大規模な被害を受けた。

大津波警報が発令され、1 階の入所者は 2 階に避難しようとするもエレベーターが使用できず、入所者 1 人 1 人を抱えて階段を上がる者、階段まで誘導を行う者、入所者に動揺を見せないよう安心する声掛けを行う者と全棟の職員が協力し合い緊迫した状況の中で避難を行った。苑内の至る所で物が倒れたり破損したりしたが死傷者が出なかったことが不幸中の幸いであった。

道路状況が悪く発災当日は苑に泊った職員もあり、次の日から道路状況が悪い中時間をかけて出勤する職員、自宅が被災し片付けをしながら出勤をする職員、学校が再開できない中、余震が続く自宅に子供や介護をしている家族を置いてくる職員、子供と一緒に苑に出勤し業務にあたる職員とそれぞれに被災しそれぞれ抱えるものがある中で、出勤でき

ない職員の分も入所者を不安にさせない様、平時と変わらずどのようにケアを行えるかを日々試行錯誤し実施し行うことができた。それらは、簡単なことではなく、多くの人たちからの支援があったからこそ行えたということは紛れもない事実である。

また地域の独居の高齢者のために、福祉避難所を立ち上げ積極的に受け入れを行い地域に根ざした対応を行ったことで、在宅で独居生活をしている人々に不安なく過ごしてもらうことができた。

人と人とのつながり、地域とのつながりの大切さを今回の震災で学ぶことができた。

【平時と変わらず運用できたこと】

食事はディスポ弁当箱ではあったが、非常食などを使用して提供できた。被災した職員の中には、避難所から通う職員もあり食事や睡眠、十分な休息がとれていないなど、肉体的、精神的にも疲弊している職員が多かった。ただ交通の支障などで出勤できない職員のために業務の調整を行うことは多少あ

っても、限られた業務を行うことを優先したため大きな支障はなかった。

【平時のように運用できなかったこと】

市内の断水により、水が使用できず、食事、排泄、入浴すべてに支障をきたした。食事は調理場も炊飯器などの機材が壊れて使用できず通常通りの食事準備が困難であった。温かい汁物を提供したかったが、150食近くの味噌汁の準備が当時はすぐに対応することができなかった。1月と寒く暖房も使用できない中で温かい物を提供できなかったことは入所者に対して申し訳なかった。4日目に主食が提供できなくなり、朝は栄養補助食品のカロリーメイトゼリーと、水分は牛乳、ヨーグルト、ヤクルト、ポカリスエットのみで「こんなんで、足りるわけない」という厳しい意見もあった。排泄面ではトイレの水が使用できないため、ポータブルトイレにゴミ袋を入れてオムツを敷き、用を足す形をとっていたが、「前の人の排泄物の臭いを感じて嫌だ」という声もあり、定期的に確認しゴミ袋やパットの交換を行った。物資がどこまで揃うか分からない中での対応であったため、交換するものが足りなくなったらどうしたらよいのかという不安は常にあった。オムツ交換は暖房が使用できず、寒い中での陰部洗浄のお湯も限られた量しか使用できなかったため、拭き取りしかできず、きれいに洗浄できなかったことが衛生面での不安であった。入浴も断水のため約1か月近く中止となった。1月半ばまで暖房機能もままならず、さらに洗濯も不可能であったため衣類交換や清拭も十分にできず衛生的に良くない状態が続いた。

口腔ケアは使い慣れないマウスウォッシュを渡され「口の中がおかしい」と訴えられたり、認知症の方への使用は間違えて誤飲してしまうかもしれないという心配から口腔清拭を行った。1番悩んだことは義歯の保管であった。おしぼりで拭き口腔清拭シートで再度拭き保管をしていたが1週間もすれば臭いが出現した。義歯を水で洗うことがいかに大切かを痛感した。

暖房が使用できず、1月半ばまでは布団の中で暖

をとってもらうかカイロを使用するしか方法がなかった。入所者はリハビリ、集団レクリエーションにも参加できず居室にこもるしかない状態が続き、余震が続く中、周りの人たちと気軽に会話ができないことがストレスであったと予想される。また電話の不通により家族と連絡が取れない入所者は、家のことが気になりながらも、どうすることもできないもどかしさを口に出す方もおり、すぐに電話連絡できない環境の方に対してどのように対応できたのか考えることもあった。

【平時の運用に近づけるための連携・協力として】

学校や保育園も閉鎖しており、子を持つ職員は自宅に子供を置いていかなければならない状況であった。そのため苑内に子供を預かる場所を確保し、仕事をしながら子供の様子を見ることができたり、断水が続き入浴がままならない中「どこどこのお風呂この時間空いていたよ。」「どこどこのコインランドリー洗濯できるみたいよ。」など仕事だけでなく自身の生活情報をお互いに話しあい近況報告していくことで自身の不安な点を解消することができた。また避難所生活を強いられている職員が「避難所にいても気が滅入る。」と発言しているのを聞いた際には、何気ない会話などして精神的なフォローをし支え合うことができた。

食事は1月6日に初めてカセットコンロを使用し、温かい味噌汁を提供することができるようになった。温かい物を提供できたことで、皆さんとても喜ばれた。

トイレにおいてはラップポンという自動密封排泄機の支給があり、毎回使用するごとに片付けることが出来たため、前に利用した人の排泄物の臭いなどを感ずることなく使用できるようになった。オムツ交換では支援物資のおしりシャワシャワをお湯で温めてから陰部洗浄をすることができた。入浴ができない中での陰部洗浄は重要な役割を担っており、清潔状態を保つことが出来ていた。

1月半ばには棟内や室内に暖房が入るようになり、暖を取りながらの衣類交換や、支援物資の清拭

タオルを温めて体を拭くことができるようになった。また 1 月末には法人内の病院、施設を利用して入浴サービスを受けることができた。入所、通所、リハビリ、事務所職員総出で車を往復させながら、また病院職員の支援も受けながら入所者皆さんの初湯をお手伝いできたことが何より嬉しかった。入所者が入浴時に見せた心地のよい顔や、入浴後迎える車を待つ間病院の窓の外から見えた明るい空を見て「本当に良かった、気持ち良かった。」と入所者から言われたことは私の介護人生の中で生涯忘れられない記憶となった。施設の水の復旧後は隣接する施設に声をかけ、入浴場所を提供し合う連携ができた。また、ソフトバンク社から循環型シャワーや循環型手洗い機の提供を受けたことで、職員のみならず、福祉避難所の入所者も使用することができた。生活用水も毎日、職員が交代で水汲みに行っていたが、市から毎日受水槽に 36 t もの水の支給を得られたことで生活用水として様々な用途でできるようになった。

気になっていた口腔ケアも、支援物資で飲料水や生活用水の確保ができた時点で洗浄、保管、週 1 回の義歯消毒を行うことができるようになり、「当たり前でできること」が少しずつではあるが戻ってきた。

暖房は当初カイロや、オイルヒーター、セラミックヒーターの貸出支援を受けていたが、やはり雪などが降ると朝、夕の冷え込みが一番こたえた。ジェットヒーターで棟内を暖めることができるようになってからは、入所者の皆さんの離床する時間も増え、活動や会話をする機会もできたことで気持ちの安定も見られてきた。また、オイルコントロールヒーターを使用し寝たきりの方への温枕を作り使用することができた。

法人内で使用している Microsoft Teams（マイクロソフトが提供しているメッセージングアプリ）を活用しながら、困ったことや欲しい支援物資の手配、調達を迅速に対応してもらえたこと、途中病棟内に新型コロナウイルス感染症患者が入り、十分な環境でない中での対応ではあったが早期に陽性者を病

院で受け入れてもらえたことで苑内での感染拡大を最小限に食い止めることができたことは感謝に尽きない。

【考察】

今回津波の被害や建物の崩壊など、最悪の事態は免れることができたが、地震が起きた時 1 階から 2 階へ入所者を避難させる際スムーズに行うことができなかったという報告もあり入所者を安全に運ぶ担架など、いつでも誰でも使用できるように準備と訓練が必要である。今までの防災訓練では「地震」に対してこれほどの強い揺れを考えることができないまま訓練に参加していたが、実際に津波が身近に迫ってきた時に、どのようにして動くべきかを職員自身がひっ迫した状況を想定して訓練していかなければならないと考える。

またライフラインの復旧がなかなか進まない中、電気は使用できたが暖房が使えず、気温の低下などで一歩間違えば入所者の命に係わる状態であったこと、もしこれが今年の夏のように気温が高い状況でかつ冷房が使用できないときだったらどのように対応すればよかったかと考えると、まだまだ災害時において入所者の体温調整のためにどのように対応していかなければならないか考えさせられた。また、今回停電にはならなかったためパニックにならず何とかしのげたが、電気が使えなくなった時、酸素濃縮器や吸痰器等医療処置が必要な入所者に提供する災害用のポータブル蓄電池の準備の必要性も認識させられた。

支給された支援物資を入所者のためにどのように有効活用していくかを季節、食事、入浴、排泄面などに分けて考え、多職種で話し合いながら最善の方法を迅速に判断し実行していくことが大切である。

職員も苑に来て周りのスタッフと会話し業務を行っていくことで孤独にならず、お互いの被災状況は違えど話し合える環境であったからこそ精神的にもフォローされた。ボランティアの方々に業務を助けられただけでなく、様々な励ましや、温かい労

いの言葉をかけてもらった。また、苑が行っている業務で良い所を褒めてもらい、我々が行っている業務のすばらしさに改めて気づかされた面もあった。今後も良い部分をさらに伸ばしていけるよう入所者のためにより良いケアを職員一丸となって行っていきたい。

【結語】

今回の震災は、施設職員だけの力では到底乗り越えられる壁ではなく、周囲の助けがあったからこそ乗り越えることができた。様々な角度から多職種で検討、シミュレーションを行い、災害時に迅速に対応できるような仕組みを平時から施設全体で作っていかなくてはならない。